

## 体験と言語活動から考える実践的な著作権意識の育成

～子ども記者による地域・朝市の発信活動を通して～

上越教育大学附属小学校 水谷 徹平

### ■はじめに

本校がある新潟県上越市は、海、山があり、雪が多く降る四季の変化や自然に富んだ地である。子どもたちは、「じょうえつ.net」という情報発信局を開設し、子ども記者・子どもカメラマンになりきって、デジタル一眼レフカメラと取材手帳を手に、朝市や市内各地に繰り返し訪れ、心の動いたものを取材して、フリーペーパーにまとめる活動を行った。また、春から、国語の帯単元「あわせうた」で詩作に取り組み、生活の中で感じ考えたことを写真や図、模様などとあわせて詩に表現してきた。体験とかかわった言語活動の充実によって、著作物活用の実践力と著作権意識を育んだ実践を紹介する。

### ■魅力的な地域素材を活動の対象に

地域には、二・七の市、四・九の市という朝市が定期的開催され、にぎわっている。毎週、訪ねて取材したり、お小遣いをもって買い物取材をしたりすることで、旬の味覚を味わったり季節の移ろいを感じ、お店の人と顔馴染みになって、地域や人のあたたかさを感じている。

また、地域には温泉地や海水浴場、スキー場といった観光地も多い。

月1回、子どもが計画を立て、電車やバスで市内の各地に赴く「お出かけ取材」で、自然の豊かさや地域の人のあたたかさを体感している。

季節に即した人々の営みや地域のよさを体で感じ、フリーペーパーや詩に表わす活動を繰り返す中で、著作物活用の実践力と著作権意識を育む。

### ■さあ、取材へ出かけよう

#### ・子どもカメラマン誕生

春、3年生38人の子どもたちとの学級開き。昨年担任していた5年生のきょうだいをもつ子や、始業式、入学式で写真撮影をする担任の姿を見た子から「先生ってカメラマンだね」「コンピュータが上手なんだよ」「僕たちも使わせてもらえるのかな」などといった声が聞かれた。「みんなもカメラマンをやってみる？」と投げかけると大喜び。渡したカメラを手に、早速外へと飛び出したその日から、子どもカメラマン、子ども記者としての活動が始まった。取材手帳と一眼レフカメラを手に、春探しや、学校の周りを探検して地図にする活動を始めた。

#### ・ファインダーをのぞいてみると

学校脇の原っぱは、まだところどころ雪が残る枯れ野原。しかし、1、2年生で毎日遊んできた馴染みの場所である。「あ、こんなところに春を見つけた！」と、フキノトウやツクシ、まだ固い桜のつぼみを探し出していく。50mmマクロレンズを付け、腹ばいになってシャッターを切っていた直樹さん。「上手に撮れたよ」と見せてくれたフキノトウの写真をレビューしてビックリ。「フキノトウって、この一つ一つが花なんだ！」興奮して友だちにも教え、観察が始まる。取材手帳に挟んだカードにスケッチする子、理科室に虫めがねを取りに行く子、レビューを拡大して確認する子と大騒ぎ。早速、特ダネスクープの一つ見つけた。

シャッターボタンだけ教えた一眼レフカメラは、子ども同士で試行し、教え合いながら使い方を習得して、構図や主題を意識して撮影をしていくようになった。

#### ・朝市を訪れて季節を感じる

4月12日、取材を重ね、取材カードもたまってきた子ども記者。昨日も、桜咲く高田公園取材の後に、駅前の本町まで足を伸ばした。今日は、学校から歩いて15分くらいの通りに開かれる朝市に出発。

色とりどりに咲く花に、山菜やタケノコなど山の幸、キムチ屋さんに果物屋さん。面白そうなものを次々見付け、観察してカードに描いたり、写真を撮ったりしていく。



見たことのない山菜を見つけた誠人さんは、早速、お店の人にインタビュー。

誠人さん：「これは何ですか？」

お店の人：「これはね、イタドリという山菜だよ。」

誠人さん：「おじさんが採ってきたんですか？」

お店の人：「そうだよ。これくらいの大きさだと、柔らかいからおいしいよ。」

誠人さん：「もっと大きくなるんですか？」

お店の人：「2mくらいになるけれど、大きくなると固くなっちゃうんだよ。」

担任：「先生は172cmだから、先生よりもっと大きいよ。」

誠人さん：「すごーく、大きくなるんだね。」

お店の人：「春の芽とも言うね。茹でて食べるときっと春の味がするよ。」

一人300円ずつお家の人からもらって出かけた朝市取材。誠人さんは、春の芽イタドリを買うことにした。他にもフキノトウやコゴメ、タケノコなどの春の味を買う子ども、枝で売っている桜の花を買って教室に飾った子どもなど、思い思いにお店の人とのコミュニケーションをしながら買い物を楽しむ。教室に戻っても、買ったものを自慢し合う子、花を飾る子。イタドリやコゴメは天ぷらにして味わった。

### ・ たまった取材カードを見直して…

「また行きたい」という子どもたちの声に押され、4月、5月と15回ほど朝市に出かけた。買い物を重ねる中で、たくさんものに出会うとともに、学級でもコゴメ、ワラビ、新ジャガ、イタドリ、トマト、トウモロコシ、タケノコ、梅から作った梅ジュースなど数多くを味わった。ファインダーをのぞいて写真を撮ったり、お店の人に説明を聞いたりしながら、お店に並ぶ珍しいものをみつけ、取材カードに見付けたり驚いたりしたものやことへの気付き、お店の人との会話などを記し、蓄積していった。

学級の友だちには、朝市取材が終わった後にどんなものを見つけたかを伝えている。さらに「いつも優しく接してくれる朝市の方やお家の人に、自分たちが見つけたものや心が動いたことを伝えたい」という声から、フリーペーパーをつくることになった。

いつも通う朝市の花屋さんで、ピンクでふわふわの面白い花を見つけた沙耶さん。ケイトウの仲間、「猫の尻尾に似ている形なのでキャットテールという名前だよ」と教えてもらった感動を、トップ記事に選んだ。撮ってきた写真を貼り、見出しや小見出し、本文の内容を考えて、「変わったお花や優しいお店の人との話が楽しい朝市の花屋さんへぜひ行って見て下さい」と、自分の感想や考えを書く「子ども記者の目」を表し、カラーコピーして渡しに行った。

「上手に書いたねえ」と褒められ、お店に貼ってもらって満面の笑み。フリーペーパーにまとめることで、客観的な情報と、自分の思いや考えの双方を再認識し、見つけた人、もの、ことへのとらえを確かにしていった。

### ・ たくさんの人に伝えるためのブラッシュアップ

フリーペーパーを、もっといいものにしようと、タウン誌「にいがたkomachi」の編集部長の井上さんを招いて、読む人の心をつかむにはどうしたらいいかを考えた。隆弘さんが書いたフリーペーパーのトップ記事は春日山の

大砲。赤錆びた大砲に興味をもって撮影したものの、聞く人もおらず、近くにあった石碑も難しい崩し字で、由来がよく分からない。撮った石碑の写真を大学の先生に見せたり、ウェブページや本で春日山にある大砲を調べたりする中で、日露戦争でロシア軍から鹵獲した砲であると分かった。隆弘さんは、レプリカだと思っていたのに、本当に戦争で使われていた





もの、しかも、日本のものじゃないことに驚く。そのことを、読み手に分かってほしいと考えて、大見出しを「レプリカかな？本物かな？」とした。内容を端的に表わすのではなく、何のことが書いてあるのか読みたくなるキャッチコピーにしたのである。「写真をトリミングして、大砲の迫力を増やすといいよ」「行き方の地図も描くといいんじゃない？」「本当かどうか確かめないと見た人に悪いね」と、よいところやアドバイスを交流し、様々な立場の人が読んだ時、どうすれば心を動かし、正しい情報を伝えられるかを考えた。

「記事を書いてみる？」という井上さんの言葉から、雑誌の記事を書くことになった。学級全体で何を書くか考えた春・夏の記事は、沙耶さんの取材したキャットテールを題材にした。写真や言葉、キャッチコピーを選んだ「誰でもお店の人と気軽に話せる朝市」。自分たちの記事が本屋さんで売っている雑誌に載っているのを見て、子ども記者は大喜び。

地域や社会とかがわり、上越市のよさをたくさんの人に伝えられる充実感を得ていた。

### ・情報発信をするときに気を付けること

11月、30回以上朝市を訪ね、書いたフリーペーパーも8枚を数える頃、子ども記者は朝市のものだけでなく、人にも興味が向いていた。

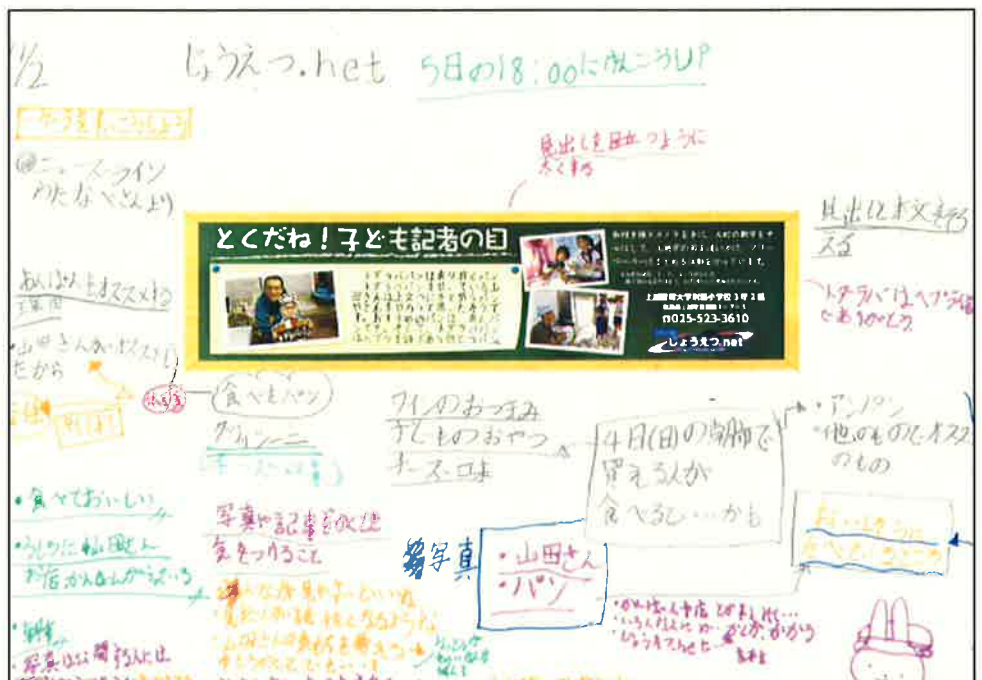
熾烈なコンペの末、「新潟 komachi 12月号」の記事に選ばれたのは、朝市に焼きたてのパンを出している、「トダラバパン」の山田さん。限られた文字数の中で、キャッチコピーと本文を考え、3枚の写真を選んだ。

取材してきたことを基に、記事の内容を決めていく。トダラバパンの名前の由来や紹介するパンであるグリッシーニの説明は、トダラバパンでもらったチラシを参考に書いた。

さらに、「実際に食べ比べをして味について書こう」「僕たちが食べている写真も加えよう」と取材を重ね、細かい文章を直した。締め切り前日の日曜日にも取材しに行き、「新潟 komachi」に載ること、記事はこれでいいかを山田さんに確認して、文章を推敲した。

朝市を訪れたくなったり、訪れたお客さんが食べたいと思うような記事にしようとするとともに、販売される雑誌の記事に間違いがあったり、誤解を招いたりするような表現があった時、どうなるかを考えた。自分たち「じょうえつ.net」の信頼が落ちるだけでなく、「新潟 komachi」の井上さんや渡辺さん、トダラバパンの山田さんのイメージが悪くなったり、売り上げが落ちたりすることを想像して、記事を考えたり内容を確認したりした。

かかわりを深めてきた人の記事を雑誌に掲載して情報発信を行うことによって、チラシから正確に情報を引用し、自分たちで食べて味を確認したり、山田さん本人に確認したりするといった行動へと結び付いた。読み手を意識するだけでなく、書かれた人の気持ちや情報の信頼性を意識し、情報発信の影響を考える素地を育むことが出来ていくと考える。



**トダラバパンはどんなパン？ [推敲前]**  
 山田さんは上越に来てからトダラバパンを始めました。ぼくたちのおすすめはあんパンです。あんこがぎゅっしり入っています。すぐ売り切れてしまいます。朝市に来てみてください。

**トダラバパンはありがとパン [推敲後]**  
 上越に来てからトダラバパンを始めた山田さん。わたしたちのおすすめは外はパリッ、中はふわっ。ピザみたいなグリッシーニ。一回食べたらあなたもおどろく。トダラバはありがとう。

■どこからのまねはいやか、詩を紡ぐ中で著作権を考える

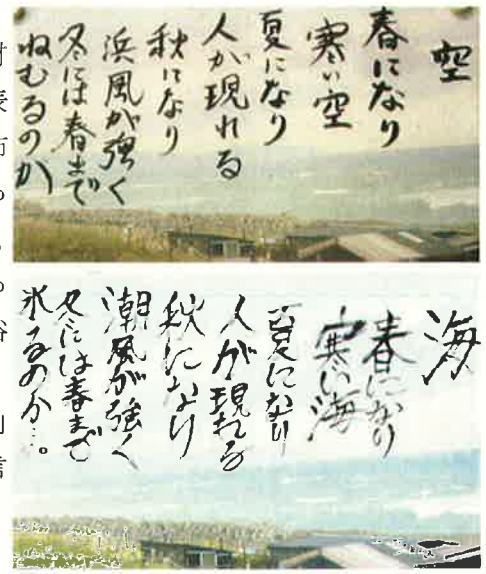
春から国語の帯単元「あわせうた」で詩を紡いできた子どもたち。取材で撮った写真，モダンテクニックで偶然できた模様，心に残ったものを表した絵とことばをあわせて自己表出してきた。10月の朝市感謝祭で朝市にお店を出した時には，詩を印刷してポストカードにし，お客さんに買ってもらえたことをとても喜び経験を積んでいた。「あわせうた」の活動では，前回作成した子どもの作品をいくつか紹介し，味わったり技法を読み取ったりして，詩作に入る。この日は，お出かけ取材で出掛けた鵜の浜海水浴場で撮られた写真とのあわせうたである「空」という詩を紹介した。

貼った瞬間，「健ちゃんの詩だ」という声。「春夏秋冬が描かれていいね」「風がすごかったよね。冷たさがよく表れている」といつものように感想を言う子どもたち。しかし，作者と目される当の健一さんは首をかしげている。

健一さんから出た言葉は「これ，似ているけど，僕の詩じゃない」。

黒板に健一さんのオリジナルを貼ると，「写真が同じだ」，「ことばはちょっと違うけど…」と気づき始めた。「健ちゃんの詩じゃないんだって」「犯人が分かった。先生が書いたんでしょ」「勝手に写真を使っちゃだめ」と話し出し，写真を撮った健一さんに許可を取らず，勝手に使っていることについての意見が多く出た。その後，用意していた色違いの写真やトリミングした写真を提示して，これであればどうかと問うたところ，「色が違っていいんじゃない？」「でも，撮ったのは健ちゃんだし…」と議論は伯仲。意見がまとまるきっかけは撮影者である健一さんの「ただ使われるのもいやだけれど，勝手に改造されるともっと困る」という言葉であった。話し合い，「勝手に使うのはよくない」「撮った人に使っていいかどうかを聞くとよい」ことが確認された。

もう一つ，「プチプチウニ丼」という詩を紹介。写真は違うものの，「プチプチ鮭丸」という孝雄さんの詩と言葉を教師が少し変えたものである。2つ目ということもあり，「これじゃあパクリだよ」「同じ言葉があるようなものはダメ」という意見が多く出た。頃合いを見て，穂乃さんの「プチプチプッチン」という詩を紹介した。穂乃さんと孝雄さんは詩作をする時の席が近い。穂乃さんは「イクラの写真の前に書きだしが浮かばなかった時，孝雄さんの作品をヒントにつくった」という話を教えてくれた。さっきまでは「分かっているのに真似するのはパクリで悪い」という価値だったのが，また議論百出，どうなのか悩み始めた。「穂乃ちゃんは分かっているのに真似したんだし…よくないんじゃない？」「でも，お互いいいところは真似するからいい詩になるんだよね」，「同じ言葉が全部だめなわけじゃない」，「でも，ウニ丼の詩は言葉を変えただけで真似しすぎ」，「穂乃ちゃんみたいにヒントにするのはいいんじゃない？」，「中身をつくったのは穂乃ちゃんなんだから」そんな話を基に，何がよくなってどこまでがいいのかを話し合った。

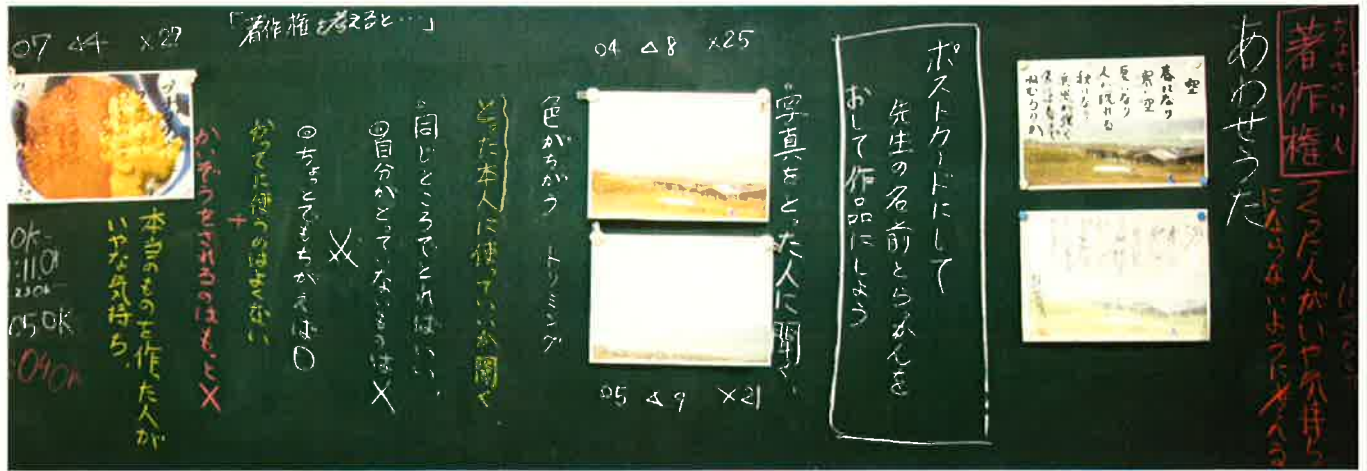


ウニとイクラはなかよしだ	コンピネーションばつぐん	ウニとサケの卵	プチプチうに丼 教師	プチプチしょうかん	カフトシシヤモの卵入り	鮭の身とししやもの卵	コンピネーションばつぐん	鮭とししやものはなかよしだ	プチプチ鮭丸 孝雄
小さなしゃけもわすれずに	すじこめんたい	プチプチお名前わすれずに	からーいからーいメンタイ	いえいえタラコじゃないんです	そうそうおとなり忘れずに	こちらもプチプチたらこさん	スジコ、スジコです	プチプチプッチン	穂乃

**「著作権を考えると…」 穂乃**  
 私は人のつくったものをまねして，「自分のものです」というのはよくないと思います。なぜなら作った人も悲しいし，まねした人も人が一生懸命作ったものを「自分が作ったものです」とうそをつくのはよくないと思うからです。かいぞうするのもしたら悲しいと思います。でも，少しヒントをもらうのはいいと思います。いいものができるかもしれないからです。人が作ったものをうつしたり，かいぞうして人を悲しませたりしたくないので，やらない方がいいと思っています。でも，ヒントはもらっていいものをつくっていきたいと思います。

子どもたちのまとめた結論は，全ての真似がだめなのではなく，「つくった人が嫌な気持ちにならないようにすること」，「大丈夫かなと思ったらくつった人に聞くこと」であった。子どもの中から，中国のキャラクターにかかわる事例が挙げられたり，以前に撮影した写真を雑誌やフリーペーパーに掲載する際に話しあった肖像権と似ているという話が出たりしたことから，「著作権」という権利があって，法律でも守られていることを教師が示した。  
 活動後のシートで，作った人の気持ちを考えて行動すること，ヒントをもらいながらいいものを作っていきたいことを穂乃さんが記したように，子どもたちは，著作者の心情や利益を考え，許諾を取って著作物を扱う基になる心情を育んだ。





## ■実践における子どもの学び

### ○思いの強い著作物だからこそ互いに大切にしようとする

朝市や市内を繰り返し訪ね、人、もの、こととふれる中で、「おいしい」「びっくり」「うれしい」など、様々な心の動きが生まれた。また、人に伝えたくてたまらない「特ダネスクープ」を見つけてきた。そんな思いを込めたフリーペーパーや詩だからこそ、自分や友だちの著作物を大切にしようとする思いが生まれた。

3、4年生という発達を考えたとき、「～しなければならぬ」ではなく、自分の体験を基にした「～せずにはいられない」という子どもの内発的動機に基づく価値生成が望ましい。思いの強い著作物をつくる経験が重ねられるからこそ、著作者の心境に思いを馳せる想像力や実感が生まれたと考える。

### ○フェイストゥーフェイスの関係から実感する情報発信の責任

朝市に繰り返し訪ね、フリーペーパーをお店に飾ったり、おまけをしてくれたりするお店の方とかかわってきた。インタビューをする中で名前、どうしてお店を出しているかなど、お店の方の背景まで分かった上で、かかわりを繰り返している。大好きになったお店の人を思い浮かべてつくったフリーペーパーを渡し、読んで褒めてもらったり、お店に貼ってもらったりというフィードバックを繰り返した。また、「あわせうた」では、春から詩作と学級内での交流を続ける中で、「～くんらしい作品だね」と、その子らしい作風や詩のジャンルが認知されている。作風や技法、表現の工夫やモチーフの選定で刺激を受け合い、オマージュも多い。フェイストゥーフェイスの関係とフィードバックを受ける積み重ねが、情報発信の責任や著作者の気持ちを考える素地となっている。

### ○パブリックとプライベートをまたいだ情報発信から言動の影響を考える

著作権上問題があったとしても、法的な問題にならない家族や学級内といったプライベートな発信と、多数の人に影響が出る雑誌やウェブなどのパブリックな発信、その狭間とも言える顔馴染みの朝市の方への発信を経験することで、自分たちの言動の影響を考えるようになった。雑誌への記事作成では、情報の信頼性、著作権や肖像権など、情報発信に対する責任や社会への影響を体験的に感じ、様々な立場に立って考えた。また、あわせうた作成にかかわって、技法の真似はいいが、アイデアの真似はやめようという視点で、迷ったときには本人へ確認するという視点をもった。パブリックとプライベートをまたいだ情報発信から、著作権者の心情や不利益を、実感をもって考え、著作者の権利や著作物を守ったり、許諾を取ったりしようとするようになった。

## ■おわりに

子ども記者は、感じた地域のよさや人のあたたかさ、季節の移ろいを写真やフリーペーパー、詩などで表現・発信した。体験を通して感じ、考えたことを情報発信することにより、地域や季節とのかかわりに意味付けされるとともに、必要な情報を主体的に収集、判断、表現、処理、創造する活動を繰り返し、著作権意識を含む実践的な情報化社会に参画する態度が育まれた。

体験を基にした子ども発の学びは、子どもの心に深く根を下ろす反面、場当たりの必要な内容を網羅できない危惧がある。3年生における情報活用力や著作権にかかわる教育の位置付けを教師がしっかりと思い描き、子どもと活動を営む中で、子どもの体験場面から感度高く考える場を設定し、実践を進める必要がある。

小学校段階での情報活用力、情報化社会に参画する態度の育成に当たっては、顔と顔が見える実際のかかわりの中で、コミュニケーションのよさをたっぷりと感じる大切であると考え。3年生という9歳半の節目直前の子どもがもつ行動力と自発性を十分に発揮させ、実感あるコミュニケーションを体得することで、これから生きていく高度に情報化された社会の中でも、顔の見えない相手へ思い馳せることができるようになる。